論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　心理学　）	氏名	小澤　郁美
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

幼児における外部情報のソースモニタリングとワーキングメモリの関連

論文審査担当者

主　　査　教授　湯澤　正通

審査委員　教授　中條　和光

審査委員　教授　杉村伸一郎

審査委員　教授　森田　愛子

〔論文審査の要旨〕

本論文は，就学前の幼児を対象とし，外部情報のソースモニタリング課題とワーキングメモリ課題を実施し，両者の関係を検討したものである。ソースモニタリング（source monitoring: SM）とは，自身が持つ情報の起源を探ったり判断したりする認知過程のことである。その中で，記憶の情報源が外的かつ行動の主体が他者である場合，外部情報の SM と呼ばれ，発話者の識別等が含まれる。他方で，ワーキングメモリ（working memory: WM）とは，短時間必要な情報を保持し，同時に操作を行う記憶機能のことである。WM は，中央実行系，音韻ループ，視空間スケッチパッド，エピソード・バッファ（episode buffer: EB）の４つの構成要素から成る。中央実行系では注意の焦点化・切り換え・分割が行われ，音韻ループでは言語的な情報の保持，視空間スケッチパッドでは視空間的な情報の保持が行われ，EB は，言語的な情報や視空間的な情報を含む様々な情報を１つのチャンクにバインディングする。

論文の構成は，次のとおりである。

第１章では，幼児における外部情報の SM の正確性に関わる記憶機能として WM の役割を明らかにすることの必要性を指摘した。従来の研究では，幼児を含む子どもにおいて，SM と WM との関連の有無について一貫した結果が得られていなかった。その原因として，従来の研究では，単一の言語性 WM 課題で WM を測定し，かつそれらの課題が研究間で異なっていた点を指摘した。そして，言語性 WM と SM との関連に交絡する可能性がある視空間性 WM や EB の影響が研究間で異なっていた可能性を論じた。そのことを踏まえ，本研究では，言語性 WM 課題だけではなく，視空間性 WM 課題や EB を測定する課題も実施したうえで，幼児の WM と外部情報の SM との関連について検討した。さらに，WM 課題に含まれる項目情報と系列情報に関する記憶を分け，それぞれの情報の記憶と SM 課題の成績との関連についても検討することで，幼児の外部情報の SM と WM の関係をより明確に，かつ詳細に明らかにすることを目的とした。

第２章では，研究 1-1，研究 1-2 で，絵本の読み手の性別に関する外部情報の SM 課題と同時に，言語性・視空間性 WM 課題を行い，SM と WM との関連の有無を検討した。その結果，幼児においても言語性と視空間性の側面から WM を測定し，かつ SM 課題も言語的

な課題と視空間的な課題に分けることでそれぞれの関連を示すことができた。

第３章では，研究２で，複数のキャラクターが発話や行為を行う動画を参加者に提示し，発話や行為の主体者の識別を要する外部情報の SM 課題を実施した。また，WM の EB の機能に代表されるバインディング能力を調べる課題を実施し，SM 課題との関連を検討した。その結果，バインディング能力が高い幼児ほど外部情報の SM を正確に行うことができることが示された。

第４章では，研究 3-1，研究 3-2 で，WM 課題を項目情報と系列情報の記憶に分けることで，WM 内でのどのような情報を保持・処理する能力の個人差が外部情報の SM 課題の成績と関連するかを詳細に検討した。その結果，自らの持つ情報がどの背景から得られたのかを問う外部情報の SM 課題においては，SM 課題の成績が視空間性 WM 課題の位置情報や言語性 WM 課題の項目情報の成績と正の関連を持つことが示唆された。

第５章では，研究 1-1 から研究 3-2 までの成果をまとめ，その意義を考察し，今後の課題を論じた。SM の正確性は目撃証言の信憑性に関わっているため，近年，SM に注目した研究が行われてきた。本研究の知見を目撃証言場面に応用するためには，目撃証言場面と関連するような負の情動や，幼児の被暗示性等を課題に組み込んだうえでの検討が今後，求められることが指摘された。

本論文は，次の２点で高く評価できる。

１．言語性 WM 課題だけでなく，視空間性 WM 課題やバインディング課題も実施し，幼児においても WM と外部情報の SM との間の関連性を実証したこと。このことは，言語性・視空間性 WM 容量が大きい幼児ほど，またバインディング能力が高い幼児ほど外部情報の SM を正確に行うことができることを意味している。そして，目撃証言場面等において，証言の信憑性の評価に WM の測定を用い，個人の得意な WM の側面を活かした証言のさせ方を行うなどの応用可能性がある。

２．自らの持つ情報がどの背景から得られたのかを問う外部情報の SM 課題においては，正しく判断できることが，視空間性 WM 課題の位置情報や言語性 WM 課題の項目情報の記憶と関連していることを示したこと。この成果は，幼児における SM の正確さを評価するとき，視空間的な位置の情報（どこに出てきたか）や言語的な項目情報（何の音声情報であったか）の記憶の個人差を考慮することの重要性を示唆している。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和２年２月１４日